

平成十九年六月一日発行 第十七卷第六号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第一九一号(毎月一回一日発行)

槐

かい

平成19年6月号

岡井省二創刊



如意宝珠

高橋将夫

なだめても止らぬ雪崩なりしかな
春一番いくつも壁を越えてきし
我が影の縮めば日脚のびにけり
羽衣の吹かれてきさう鱗東風

けなしても褒めてもよその葱坊主
愚痴一つこぼすことなき葱坊主
春風の運んできたる火の匂ひ
疾風に流されさうな春の月
笑つても泣いても回る風車
春天や命の果ては手を組んで
蛤の秘めてゐさうな如意宝珠

春 筍

岩 下 芳 子

新入生のラッパ吹きたる草競馬
連なりて南湖北湖の春の鴨
湖に真の闇あり春の月
春の夜のライブのあとの握手かな
大阪のなんじやもんじやの花あかり
白川の枝垂桜の礼礼し
妹山や躰糸解く春袷
接待の袂を挟む花衣
草笛の合図ありけりケーナ吹く
チューリップ嬰の喃語に応へけり

特別作品

嵐電に乗つて御室の遅桜
蝌蚪の紐吹かれてゐたる細濁り
海峡の潮の境目養花天
菜種梅雨藍瓶の藍守り継ぐ
逃水の窪みを跨ぐ大きい足
紫雲英摘む万葉人の首飾り
天の宇受売辛夷あかりに歌舞へり
春箏の刺身天ぷら目出度けれ
水中に何孵りたる揚雲雀
夏に入る日付変更線を越ゆ

槐安集

水野恒彦

春霞にびるしやなのこゑしかと聞く
おおわだを月移りつつ猫の戀
乗り捨てしふらここの揺れアラベスク
死より身を躲かぶしきつたる朝桜
つるみゐる孔雀をみたる万愚節

延広禎一

流れ鮑を煮立てし灰汁や九鬼くきの海
沙蚕ごかい掘るをとことをんな春の風
のつぺりと干さるる鱒花こんく遍路
焼かれをる榮螺のあぶく金口こんくとも
沖へ沖へ琵琶抱きたる男雛かな



加藤みき

葡萄棚の芽吹かむとする姿かな
八方の靈に拍手 冴返る
美しき畝あがりたり春の雨
通り過ぐ風に鳴りたる花馬酔木
冴返り嵯野太先生冴返りして金色に

石脇みはる

春曉の櫺の林となりゐたり
白和のごごみの緑食しにけり
種俵川の流れの弧となりし
龍神の山ふところのまむし草
大酒を飲みついでふき嘯し万愚節

中島陽華

煎餅や卯月八日の月出でし
歩けると云ふ春雨の出島かな
暖かや薄紙の飛ぶ二上山
足白しななくりの湯の春おぼろ
鶴の声缶蹴り遊びしてゐたり

竹内悦子

稲荷山に春の雪呼ぶ省二かな
竹筒に耳水琴窟に春の声
郁子の木に貌鳥しばし来てゐたる
青鰻や人の梟ひの闇なりし
さらさらと風みえてをるさくらかな

栗栖恵通子

啓蟄の日の槐庵に石二段
春宵のコーヒー豆のくびれかな
まつ白な手拭ひ浸す桜かな
山笑ふ神をみごもる真昼間
金色のきんちやく空海誕生日

大島翠木

如是によぜと亀鳴いてゐるあぶくかな
四月馬鹿大鯉数多閑かすぎ
昨夜の嘘混じりて雨の落花かな
さくら満開万年筆の蓋がない
春箏の笑はんとせり過ぎがてに

雨村敏子

神木の秀にかかりたる臙かな
春霞 納豆の糸銀いろに
田平子や昔の父とわたくしと
ホツチキス春の頁を留めてをる
終章はポルカのテンポ山笑ふ

小形さとる

花曇りがよし酔生夢死がよし
声ふたつ二階へあがる春の昼
それは措く蛇穴を出づそれも措く
陽炎の中より現れて瓶かめと人
行く雲の顔で草餅食ふてをる

本多俊子

少年の髪伸び地虫出でにけり
屯食どんじきのまんなか淡し春の山
親鸞の紅も絹みの重ねぎ鳥雲に
ひちりきの響きやまずよ海霞む
茜さすさくらの息を吸うてをり

天野きく江

照り過ぎる春満月に近づきぬ
何か匂ふ眉間に近き臙かな
引き潮の置き忘れたる桜貝
少年みな解け易きホワイトデー
清明やスープの油膜壊しつつ

槐市集

宇田喜美栄

時刻表を繰つてゐたりき春兆す
ゆきゆきて風の近江や烏雲に
垣根越しにしばしの喋り雪柳
琴坂に金縷梅咲くや考^ち現るる
さつそうと歩いてゐます春の風

大山 里

堂縁に梅も終りの日差しかな
葱坊主見てゐてつまみたくなりぬ
山おりの芽吹き枝に触れながら
湖に向く八十八佛蠅生るる
風音は椿の土をまつ赤にす

奥村邦子

天地の笑ひ出すなり鳥の恋
しやぼん玉ひかり合ふなり摩天楼
かぎろひてパントマイムの指の先
空海の雲ふんはりと春意かな
つばくらやぐんぐん迫まる朝日影

加藤富美子

初蝶やノアの方舟夢の中
摩天楼黄砂しづかかに降下せり
一年を一日に散らすさくらかな
曼陀羅の奥は明るし春の月
紫衣の僧散りゆく花を落しけり



槐集

高橋将夫選

おどろきを掌に受けてをり春あられ
枚方 中野 京子

どつと湧く背ナの臍に押されをり
紅椿 白玉椿 退院 す

春光の石灰撒きし土湿り
風に生れ風に引きゆく雁の声
春光やしかと大地に槐の幹
近藤きくえ

太平洋の波と戯れ春日影

比良山比叡山はるかなりけり揚雲雀

谷風となり白木蓮紫木蓮

酒蔵に消えてゆきたる春裕

春愁を払ふ山風なりしかな

啓蟄の西へ飛びたる白帽子

春風を酔めしに入れて寝まりたる

駒返る草に羅漢の泣き笑ひ

茶屋裏の池に戻りし春の鴨

京都 竹中 一花

蒲公英の穂絮ブツセの空にかな
岡崎 近藤 喜子

降る音を愛語と聴きぬ木の芽雨
陽炎や駆けてくる子に尾のありぬ
牧びらき新生代の息吹かな

四神の気配うきうきと春の闇
童神に乳房つかまれうららけし
あしかびや受胎告知となりぬたる
安城 近藤 公子

田の神の虹を渡りて来たりけり

蕨とる智恵子の空の下にかな

四月来る甕に未来を詰めにけり

猩々てふ美酒もて祝ふ春槐誌
近藤きくえ

春光や言霊あふる槐の幹
枚方 谷村 幸子

丹の門をくぐれば白き梅の花

歌ふかに伎芸天女や春灯

春疾風矜羯羅童子合掌す
こんがら

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

紅 椿 白 玉 椿 退 院 中野 京子
退院の日の実景。退院の喜びが紅白の椿に収斂している。省略しきつたこの表現、これぞ俳句といったところ。有名な「紅い椿白い椿と落ちにけり 河東碧梧桐」の世界とはまた違った喜びの世界。

比良山比叡山はるかなりけり揚雲雀 近藤きくえ
「ヒラヒエイはるかなりけりあげひばり」と実になめらかに雄大な景が詠まれている。「比良山、比叡山」で揚雲雀の飛翔する高さが目に浮かんでくるようだ。

降る音を愛語と聴きぬ木の芽雨 近藤 喜子
「愛語」というのは、衆生を見るに、先ず慈愛の心を発し、顧愛の言語を施すなり…」（『正法眼蔵』菩提薩埵四摂法）。木の芽雨の音はまさしく慈愛の言葉のように、心をなごませてくれる。

田の神の虹を渡りて来たりけり 近藤 公子
虹を渡って来たというから、夢見る少女かと思ったら、田を守る神さんだということから驚いてしまった。農業にも明るい未来が見えてきそう。

猩々祝念符集号てふ美酒もて祝ふ春梶誌 谷村 幸子
「猩々」という名の美酒があるそうだ。『猩々』は故岡井省

二先生の第八句集であるが、「槐」創刊後としては最初の句集。めでたい。

ガブリエルの声の聞こゆる臙かな 岩月優美子
ガブリエルは神の意を伝える天使。マリアに受胎告知をしたという。天使の声というか、神の意というのは作者によればどうも臙らしい。

一望の梅を生た活きの峠茶屋 久保東海司
梅を一望する見晴らしのよい峠の素朴な茶屋。まさに絵になる風景。きつと梅見の客も多いのだろう。生活に結びつけたところに作者ならではのものを感ずる。

干菜乾くちりちり胸に痛きこと 近藤 紀子
大根や蕪の菜が干してある。それが乾いてきた。かさかさではなく、ちりちり乾くと言われて、胸の痛みにつながる感じが納得できた。

花蘇芳天の網島までの道 十川たかし
鮮やかな紅紫色の蘇芳の花が咲く道。これが天の網島までの道という。遍路路よりこちらの方を歩いてみたい気がするが、近松門左衛門の心中もの世界に入ってしまったら。

草餅や生まれ変わりし者もぬて 大山 里
草餅と聞くと、生まれ育った故郷の山河が懐かしく思い出される。健在の人も、鬼籍の人も区別なくごやかに草餅を食べべている。そんな故郷の光景が浮かんできた。

(以下略)